

未来を育てる、 無言のアール型シンク。【技術の継承】

工場内に何気なく置かれた、納品予定のないアール型シンク。かつて働いていた先輩が製造し、無言で残していったものである。そこに込められた高い技術が、後輩たちへ、何かを伝えている。



voice

入社3年目です。最初は全く何もできませんでした。少しずつ技術を磨いていきました。勉強方法は、先輩の仕事をよく見ていること。「どうしたらこんな風に見えるんだろう」ということがたくさんあります。そんな時は、自分でいろんな方法を試してみ、どうしてもわからない場合にのみ先輩に訊ねます。



シンクの底面から側面につながるアールは、その工程を簡単に想像させてくれない。

溶接技術の習得には10年以上の研修が必要だとされますが、弊社では皆、1年で一通りのシンクを作るまでの成長が求められます。これは普段から、アール型シンクへの学びと同様に、考える機会がもたらされる環境で、自ら考えて技術を向上させているからその結果なのです。

タニコーテックには、納品予定のない1台のアール型シンクがあります。「技術は盗め」が口ぐせだった先輩技術者が、数年前、定年退職前にこっそり製造して後輩たちに残していったものです。初めて見た板金・溶接加工者の多くは驚いてこう言います。「これ、どうやって作るのですか!」このアール型シンクには技術の粋が凝縮されているのです。

弊社の若手技術者は皆このアール型シンクに興味を持ち、秘められた工程について先輩に尋ねます。しかし、その答えは返ってきません。入手できるのはわずかなヒントのみ。それを手がかりに、若手たちは自分で考え、サンプルをいくつも作り、失敗して、また作る。試行錯誤しながら、少しずつ正解に向かっていく。このプロセスこそが、技術の習得につながっていきます。

自分で考え抜いて、作る。
その機会の大切さ。